

国際比較における日本の都市構造

岩手大学工学部 正会員 安藤 昭
 岩手大学工学部 O学生員 佐藤 祐一
 岩手大学工学部 学生員 菅原 秀起

1 はじめに

世界各地の都市は、そのはじめは都市国家であり、そのため常に敵国を意識し、防御のため都市のまわりに城郭を築く都市囲郭の伝統をつくった。しかし日本の都市は、はじめから国家都市であり、都市の防衛意識は薄くそのため世界の都市の中では例外的な無壁都市として今日まできた。このような独特の都市形成の歴史をもつ日本の都市を国際比較すれば、その都市構造の特徴をより鮮やかに浮き彫りにすることができると思われる。そこで本研究は国際比較のケーススタディとして、日本の多くの主要都市と同じく、その起源が近世城下町である盛岡と、ヨーロッパの都市が確立した中世に、その典型的な都市を確立したドイツの地方都市ザルムシュタットを比較し、盛岡の都市構造の特徴を明らかにしようとするものである。

2 地理的条件

ザルムシュタットは、西ドイツ中央部のヘッセン州、フランクフルトの南約20 kmに位置し、周辺には平坦地が広がっている。盛岡は、東に北上山地、西に奥羽山脈が縦走する北上低地に位置し、市街地は、北上川、中津川、雫石川の合流点にできた河岸段丘の上に構成されている。したがってザルムシュタットと地形的に大きな違いがある。

気候条件に比べてみると、盛岡のほうが寒暖の差が激しいものの、年平均気温はほぼ同じである。しかし年間降雨量、年間日照時間については盛岡が大きく上回っている。

3 都市比較及び考察

(1) 市街地の推移

盛岡の市街地の推移をみると、道路沿いに郊外へ市街地が広がる傾向が顕著であり、団地造成や公営住宅の建設された地域や駅周辺が飛び地のように市街化されても、すぐに市街地の連担化がすすむ。これに対してザルムシュタットの市街地の推移をみると、旧市街地を中心として徐々に広がり、駅周辺や道路沿いの市街化はそれほどみられない。またEbersstadt, Arheilgen, Wixhausenの周辺市街地を合併したが、中心部の市街地とそれらの市街地との連担化はみられず、それぞれ独立した市街地として存在している。

これは日本人の強い持家志向が、著しいスプロール現象の原因と考えられる。日本では、土地が狭くても1戸建て住宅を持つという欲求が根強く、土地を求めて郊外へ市街地が広がる傾向が強い。さらに日本とドイツの都市計画制度の違いが、その傾向を助長していると考えられる。

(2) 沿道景観の推移

盛岡の沿道景観は、ザルムシュタットのそれと比較して変化しやすく、ザルムシュタットには昔からの街並(写真-3)が多く保存されているが、盛岡では昔からの街並みはなくなりつつある。江戸時代から盛岡の中心商店街であつた肴町についておても、大正時代(写真-1)と現在(写真-2)を比べれば、その変化の激しさが明らかである。

表-1

	盛 岡	ザルムシュタット
緯 度	N39°41'58"	N49°52'21"
人 口	229 123人	133 655人
面 積	398.72 km ²	122.38 km ²
年平均気温	9.97℃	10.2℃
年間降雨量	1240 mm	636 mm
年間日照時間	1946.6 hr.	1656.4 hr.



写真-1(「盛岡写真帳」より)



写真-2

これは石材や木材という建築材の違いや、日本の経済至上主義の都市計画、さらに造形に対して比較的自由的な建築法などによるものと考えられる。

(4) 河川景観について

盛岡とザルムシュタットの河川景観の大きな相違点は河川敷の有無である。ザルムシュタットにはライン川へ注ぐDarmbach, Ruthsenbach, Moudauの3本の支流が流れているが、規模が小さく、河川敷はみられない。それに対して盛岡を流れる北上川、中津川、雫石川などには河川敷が多くみられ、それを含んだ河川景観は、盛岡の景観上大きな位置を占める。(写真-4)

北上川とライン川の河川係数を比較すると、それぞれ224、14と著しく異なり、北上川の流量変化がいかに大きいかがわかる。この流量変化の大小が河川敷の存在に大きく影響するものと考えられる。



写真-3



写真-4

(5) 森林について

ザルムシュタットの市街地に隣接した平坦な土地には豊かな林が存在するが、盛岡の場合は、市街地近郊の丘陵地帯に林が多いものの、平坦な土地にはほとんどみられない。さらにザルムシュタットの林には、網目状に道路がよく整備されており、ほとんど1本道の状態の盛岡とは対照的である。短い日照時間などのために、散歩が習慣化しているドイツでは、その整備された平坦地の林が、市民の憩いの場として重要な役割をはたしている。それに対して盛岡の場合は、丘陵地帯ということもあり、日常的に利用されるということは少なく、それよりも景観的要素としての性格が強いと考えられる。

(6) 借景について

ザルムシュタットの都市景観をみると、ほとんど起伏のない平坦な土地に立地しているために、取り込む風景がなく、教会の塔や公共建造物で囲まれた広場を中心として、等高の建物群が都市景観を形成している。それに対し盛岡は岩手山を中心とした山々に囲まれ、北上川、中津川、雫石川が市内を流れるなど自然環境に恵まれ、都市景観へ取り込む風景が豊富である。そして築城当時の町割りの方向をみてみると、本町通筋は岩山山頂へ向かい、盛岡城内綱御門から大手御門方向は愛宕山山頂を指していることなどから、その方向から借景が意識されていたと考えられている。また河岸や橋梁などからの河川景観、岩山など都市周辺丘陵地からの都市俯瞰景観などに、岩手山を借景として随所に取り込むことによって、その景観をさらにひき締めている盛岡は、借景により自然の中にとけこんだ都市と考えられている。

(7) 住居表示について

地図で比較すると、住居表示が盛岡は町名になっているのに対して、ザルムシュタットはすべての街路に名前がつけられ、それが住居表示として用いられている。この住居表示の違いから、両都市の道路の機能的な違いが考えられる。中世ヨーロッパ都市の広場は市場機能のほかに、政治的な集会や祝祭などが行なわれる場所として役割をはたし、道路はそこへ通じるきわめて機能的なものにすぎなかった。ところが日本の都市には広場というものがなく、そのため道路が交通機能だけでなく、ヨーロッパ都市の広場がはたしていた生活空間の機能も兼ねていた。そこで道路は町と一体となり、道路の名前が町名に吸収されたと考えられている。また江戸時代の盛岡には、町の節目に木戸が設けられ、町がひとつの単位として確立していたことを示している。すなわちザルムシュタットは広場が中心となり、道路は交通機能だけをはたしたのに対し、盛岡では道路を含んだ町がひとつの単位となり、道路は生活空間の機能を兼ねていたことが、この住居表示の違いに表われている。

参考文献 1) 安藤 昭 : 盛岡市における文化景観の育成 : 土木学会誌1982年4月号

2) 神谷国弘 : 都市比較の社会学 : 世界思想社